

## 内なる力を引き出すエンパワーメント—スミヤさんの挑戦—

Ms. Astri HIDAYATI (インドネシア)

スミヤさんは 49 歳の女性です。現在、漁師である夫と高校生、中学生の 3 人の子どもと暮らしています。一家は海沿いの村で暮らしていますが、そこでは多くの住民が漁や魚介類の販売で生計を立てています。スミヤさんは家計を助けるために働く機会を得たのですが、それもまた漁業や魚に関連した仕事でした。

貧しい家庭で育ったスミヤさんは、若い時に適正なレベルの教育を受けることができませんでした。そのため、結婚後に生活費の足しにしようと仕事を探した時も、あまり実入りの良くないインフォーマルな仕事しか見つかりませんでした。夫は何日も漁に出て戻らないため、3 人の子どもの世話を一人でしなければならぬスミヤさんは常に時間に追われ、多忙な日々を送っていました。また世帯所得が十分でないため、あらゆることを自分でこなして支出を抑える必要もありました。

2010 年までスミヤさんは近所の子どもたちにおやつを販売し、家計を助けていました。しかし同時に、家族のために少しでも所得を増やしたいという熱意から、より良い働き口を求めて積極的に近隣の情報収集に励んでいました。スミヤさんの住まいは海辺の漁村にあり、近くには漁師が獲った魚を売る競り市場もあります。その競り市場でサバヒー（英名：ミルクフィッシュ）という魚をさばく仕事の求人情報を入手したスミヤさんは、早速応募しました。その仕事に就くには、まず海洋水産省が無償で実施している 5 日間の研修を受ける必要がありました。研修には 50 名が参加しましたが、その過程で審査が行われ、合格した志願者だけが競り市場で働く機会を与えられることになっていました。

この 5 日間の研修中に訓練を受けるのは、①サバヒーの骨を取り除く、②サバヒーを主原料とした長期保存可能なスナックに加工する、という作業です。この経験を通じて、スミヤさんは目から鱗が落ちる思いがしました。多角的な観点から物事を捉えることで、世帯所得を増やす方法は沢山あるのだと気付かされたのです。スミヤさんは無事に審査に合格して研修を終了し、競り市場でサバヒーをさばく職業に就きました。競り市場での仕事は毎日午前 10 時から午後 2 時までで、およそ 100,000 ルピア（約 1,000 円）の収入になります。競り市場での仕事を終えると、スミヤさんは帰宅して近所の子どもたちにおやつを販売する仕事の準備をします。自らの所得を倍増させるために、これまでの仕事も続けているのです。午後 5 時までおやつを販売した後は、夕食の準備にとりかかります。午後 6 時を過ぎると、漁に出る夫のために食事や飲み物、衣服などの支度をします。その後、夫が漁から戻るのは翌朝の 11 時頃になります。

2010 年に競り市場での研修を終えて就職し、収入が増加したことで、生活が劇的に変化するとスミヤさんは言います。それまでは家計が厳しく、子どもたちにきちんと教育を受けさせることができるのか分からない状態だったそうです。そのような中、世帯所得を増やすチャンスを手に入れたことで、子どもたち皆を学校に通わせることができ、スミヤさんはとても嬉しく思っています。

こうして、スミヤさんは自分の力で生活を変えようと決意し、実行に移しました。これは、状況に迫られる形でエンパワーメントを実現した女性が、最終的に素晴らしい結果を手に入れるという、まさに絵に描いたような事例だと言えます。このようにエンパワーメントを可能にした背景には、本人の意思に加え、差し迫った状況という外的プレッシャーの存在がありました。スミヤさんは、挑戦すればより良い人生を送ることが可能だということを、身をもって示してくれたのです。スミヤさんがエンパワーメントの機会を得られたのは、ひとつには無償の研修という政府からの支援のおかげであり、もうひとつは夫からのサポートのおかげでもあります。

## 第27期海外通信員レポート

スミヤさんの事例が示すように、女性のエンパワーメントは様々な形で起こり得ます。彼女はより良い生活を手に入れようと意を決し、そのチャンスを掴みました。政府からの支援というチャンスが彼女の決意を後押ししたとも言えるでしょう。このことから分かるように、女性のエンパワーメントを推し進めるためには政府による何らかの支援が欠かせません。スミヤさんが参加した研修などが非常に効果的であることが、この事例からも分かります。勿論、女性たち自身のエンパワーメントを切望する気持ちが最も重要であることは言うまでもありません。しかし同時に、その意欲を支え実現への足掛かりをつくるためにも、さまざまな場面において政府による積極的なサポートが必要とされているのです。エンパワーメントは、何も複雑で難しいものである必要はありません。スミヤさんの事例の様に、身近にいる女性たちの暮らし向きや要求を良く理解し、それに応じたプログラムなどを提供することが肝要なのです。

写真：魚をさばくスミヤさん

